

留学を通して見えた、多様性と働き方

岡山大学大学院 脳神経外科学 春間 純

脳神経外科・脳血管内治療という専門領域は、長時間労働や緊急対応が当たり前とされてきた分野であり、自身がこの専門領域を選択した約15年前には働き方や生活とのバランスを考える余地は少ないと感じていました。しかし、医師の働き方改革の波が本格化しつつある中、キャリアとライフの両立、そして多様な働き方の在り方を模索する機会が増えてきたと実感しています。今回は自身のキャリアパス形成から現在の取り組みについてお話させて頂きたいと思います。

自身は久留米大学卒業後に地元広島市立広島市民病院で初期研修を開始しました。整形外科医になるつもりで開始した初期研修でしたが、脳神経外科研修で経験した脳卒中を中心とした診療と当時の指導医の先生方の卓越した技術や熱意に憧れ、いつの間にか脳神経外科に惹かれていきました。その後は市中病院で従事するキャリア形成を考えておりましたが、メンターである杉生憲志先生に出会い、岡山大学脳神経外科にお世話になることになりました。最大のきっかけは同じ大学の部活の先輩の一言で決まりました(笑)。

岡山大学の脳神経外科研修プログラムは卒後6~10年目という重要なライフステージに合わせて大学院期間が設けられており、専門知識の習得と生活の両立が可能な柔軟な制度設計がなされていました。私自身もこのプログラムを活用し、産婦人科医の妻と共に育児をしながら博士号と脳神経外科専門医・脳血管内治療専門医を取得しました。その後はパリにあるThe Fondation Adolphe de Rothschild Hospitalに1年間の臨床留学を経験しました。

この留学経験は、私の価値観を大きく変えるものでした。留学先は脳血管内治療年間1000件を超えるハイボリュームセンターではありましたが、多くの医療従事者が高度に分業化されたチーム医療に従事しており、脳血管内治療医のみならずコメディカルを含めたそれぞれの専門性を生かしながら、時間的にも精神的にも余裕を持って働いている印象を受けました。勤務時間外の過ごし方においても、家族との時間や自己研鑽にあてることが自然と尊重されており、「働くこと」と「生きること」がうまく調和している様子に強く惹かれました。日本ではまだ課題が多い部分ですが、制度の改善だけでなく、医療従事者一人ひとりの意識改革やチーム全体の文化醸成が不可欠であることを、現地での体験を通して学びました。

帰国後も妻とは互いのキャリアパスを尊重し、柔軟に役割分担を調整しています。現在は大学に属している事から、臨床・教育・研究の三本柱に日々取り組みながら、ライフワークバランスを意識した働き方を実践しています。このような働き方は一朝一夕では成り立ちませんが、自らの働き方を見直し、職場環境との相互理解を深めることがその第一歩だと感じています。

「ダイバーシティ」と聞くと、女性の働き方支援に限定された問題と捉えられがちですが、実際は価値観や働き方、生き方に対する多様性を認め合う姿勢そのものです。私の留学経験は、脳血管内治療で学んだこと以上にダイバーシティを学ぶ貴重な機会となりました。これからも自分の経験を活かし、キャリア

パスを形成しながら周囲の医療従事者がそれぞれの生き方を尊重し合える環境づくりにも貢献していきたいと思います。



留学中に訪れた大好きな南仏と留学先のメンターと同僚